

かわさき区の宝物シート

宝物No.
5-1

ろくごうのわたし・めいじてんのうのひ 六郷の渡し・明治天皇の碑

エリア	中央地区	シーズン	通年
	旭港	日時	

目的	<input checked="" type="checkbox"/> 観る <input type="checkbox"/> 遊ぶ・体験する <input type="checkbox"/> 食べる <input type="checkbox"/> その他
宝物定義	<input type="checkbox"/> ものづくり <input type="checkbox"/> イベント・祭り <input type="checkbox"/> 味づくり <input type="checkbox"/> にぎわい <input type="checkbox"/> 現代の文化的なもの <input type="checkbox"/> 港めぐり <input checked="" type="checkbox"/> 歴史的なもの <input checked="" type="checkbox"/> 人物



出典:「2001大川崎宿祭り記念誌」

所在地	川崎区旭町1-3
問い合わせ	NPO法人かわさき歴史ガイド協会
TEL	044-221-9117
FAX	044-221-9117
E-mail	
URL	http://www.city.kawasaki.jp/61/61kusei/home/papercraft/takaramonopapercraft.htm (川崎区役所HP/かわさきの宝物・ペーパークラフト)
交通	京急大師線港町駅より徒歩10分



基礎情報

■江戸時代、東海道の往来のためには六郷の渡しは大切な要であり、幕府からの助成金によって常時10数隻の舟で旅人や荷馬を渡した。明治元年(1868)の明治天皇の渡御の際には23隻による舟橋が架けられた。現在新六郷橋には欄干の渡船のモニュメントとともに渡船跡の碑と明治天皇六郷渡御碑が建てられている。

■平成13年(2001)5月に開催された宿駅制定四百年記念「大川崎宿祭り」では、多摩川漁協、六郷マリクラブ、市消防局の協力のもと六郷の渡しを再現するイベントが催され、多くの家族連れでにぎわった。

由来・エピソード

■慶長5年(1600)、徳川家康は西国との往来のため「六郷大橋」を建造した。ところが洪水の度に修復や架け直しを繰り返し、やがて貞享5年(1688)7月の大洪水による大橋の流失をきっかけに幕府は架橋をあきらめた。その後明治初めの左内橋の架橋に至るまでの約190年もの間、渡し船による渡河が続くことになった。

■当初、渡し船は江戸の町人が請け負っていたが、宝永6年(1709)、田中休愚の働きで川崎宿が請け負うことになり、その収入が川崎宿の財政を大きく支えた。

■享保14年(1729)5月、ベトナムから幕府への献上物として渡ってきた雄の白象が川崎宿へとやってきた。象は長崎から陸路をたどり京都では天皇に拝謁、東海道を15名の従者とともに歩いてきたという。象通行にかかわる「御触書」が出され宿場はあふれる見物客とともに大きな喧噪につつまれた。予定より9日遅れで川崎宿に到着した白象は、宿内に新築された象部屋に迎えられ一泊した。六郷の渡しには近村から集められた30隻の舟と1日280人の人足によって6日間で仮設の舟橋が架けられたそうであるが実際に象が渡った記録は残っておらず、舟橋で象が渡るのには困難と船頭らが判断し、3隻の大きな荷足船を繋いで上に小屋をつくって渡したという説もある。

補足・その他

■六郷の渡しその他、かつて川崎区内の多摩川には大師河原と羽田をつなぐ渡し3箇所あった。一番下流の『羽田の渡し』は、ふだんは農作業のための「作場渡し」であったが、江戸時代後半に大師詣が盛んになると江戸方面からの参詣者は川崎宿を経由せずに羽田から直接川崎大師そばに渡った。近道で便利だったため人気の参詣ルートとなった。困ったのは客足が減った六郷の渡船場や川崎宿で商いをする人々であり「川崎宿が困窮する」と訴えられたほどという。

■明治29年(1896)に農作業のために開設されたのが『大師の渡し』で、参詣客のために羽田の穴守稻荷と川崎大師を30分で渡す早舟も運航された。大正になりさらに上流にも渡しが出来て、海老取川近くまで早舟が出されたという。

関連シート

- (1-18)旧六郷橋親柱(稲毛公園)
- (14-1)多摩川(河口干潟・桜並木)
- (31-2)田中休愚